

西三条第跡出土の遺物 4 墨書土器

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに リーフレット京都No. 337では平安京右京三条一坊六町跡(藤原良相邸、西三条第推定地)の池から出土した仮名墨書土器を紹介しましたが、同じ池からは漢字を墨書した土器も多数出土しています。西三条第の内部をうかがう重要な資料であるため、改めて紹介します。墨書土器は土師器(土器1~6)が最も多く、次いで灰釉陶器(土器7~9)、須恵器(土器10)、緑釉陶器(土器11)の順となります。

土器1 高杯の杯部上面に「三条院鈞〔鈞〕殿高坏」と書かれています。上面に墨書したのは、識別を容易にするためであったとみられます。「三条院」はこの六町が「西三条第」であったことを示す有力な証拠です。「鈞」の字は「鈞」と同意語とされ、鈞殿と書いて鈞殿と理解します。「高坏」は器の名称そのものです。

土器2 高杯の脚部外面の2つの面に「政所」と墨書しています。どの向きに置いてみてもわかるためだったので、政所は邸宅内の雑務を処理する家政機関を指し

ます。

土器3 高杯の脚部内面に「〔膳所〕」の墨書があります。「膳所」とすると、調理や配膳を行なう機関を意味し、そこで使用される器の意味があったのでしょうか。こちらは脚部裏側の目立たない場所に墨書されています。

土器4 杯の内面に「〔月〕」、外面に「今」「苑」「笕」「處」「坏」「月」の墨書が認められます。内面には墨痕もあり、習書(字の練習)をしたことがわかります。「月」が2箇所あることは観月に関する内容を記した可能性を示します。そうすると、「坏」は天空にかかる「月」にかけたとも思われます。邸内で詩文のやりとりがあったことを示す資料かも知れません。

土器5 杯の内面に「大〔身〕」「鴈〔主〕」「〔夫〕〔夫〕夫」、外面に「夫天 飯〔米〕」の文字が重なるように書かれており、墨痕鮮やかな習書の資料です。果たして何を書こうとしたのでしょうか。

土器6 杯の内面に丁寧な楷書体で「雑離」と書かれています。この句は『大方等大集経』などの

教典にあり、写経の一部とみられます。藤原良相が篤い信仰心をもっていたことは、史料からも知られるところです。

次に紹介する灰釉陶器は、釉が掛からない底部に墨書したものが多く、この場合は器の所属機関が書かれたようです。

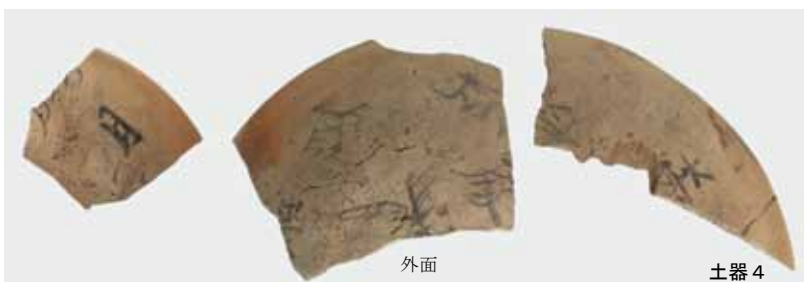


土器1

土器2 (上下とも)



土器3



外面

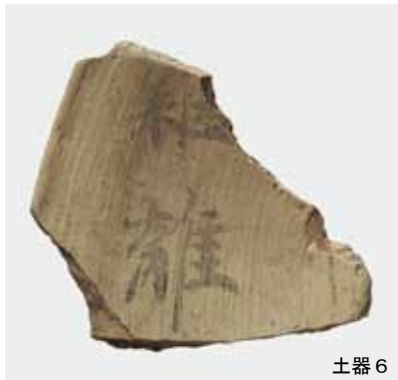
土器4



内面

外面

土器5



土器6



土器7



土器8



土器9



土器10



土器11

土器7 碗の底部外面に「内」と書かれています。通常「内」と墨書すると内裏を思わせませんが、邸宅の内部を指すかも知れません。

土器8 碗の内面中央に「庄」、同じく外面中央にも「庄」と書かれています。藤原良相は、左京六条の自宅に一族の中の自立できない者を修養する施設（崇親院）を建て、庄園からの収入を経費に当てました（『日本三代実録』貞観9年の藤原良相薨伝）。「庄」の字は庄園を指す可能性があります。

土器9 碗の底部外面に大きく「太一」と墨書されます。太一は天神祭祀の中心に位置する北極星を指し、陰陽道祭祀で使用されたとみられます。

土器10 須恵器壺の体部内面に、つくりが月の字と「兵」が4箇所以上並びます。大きな墨痕もあり、墨壺で筆を整えて「兵」の字を何度も練習したようです。ちなみに藤原良相は近衛大将の立場から「承

和の変」（842年）では兵を率いて皇太子（恒貞親王）の座所を包囲しました。また「応天門の変」（866年）でも兵を率いたとされます。

土器11 緑釉陶器碗の底部外面に「四」と墨書されています。この碗は山城産で、底部に釉を掛けなかったために墨書が可能でした。ただし「四」とは何を意味するかはわかりません。また「條」を略した「条」の字を使用しています。

まとめ 土師器高杯の土器1・2・3と灰釉陶器の土器7は建物や施設名を記しており、西三條第内部の配置をうかがう好資料といえます。一方の土器4・5・10には習書がみられ、邸内に文字を書く人が多数いたことが知られます。貞観8年（866）3月に清和天皇が西三條第に行幸した際の記述に「文人を喚して百花亭の詩を賦す」とあるのが参考になります。土器6は仏教、土器9は陰陽道に関連し、

邸内での宗教・信仰をうかがう資料です。

『日本三代実録』には貞観元年（859）3月から約1年間、皇太后藤原順子が西三條第に滞在したとの記述があります。藤原順子は仁明天皇女御で文徳天皇の母、清和天皇には祖母に当たります。兄に藤原良房、弟に藤原良相があり、藤原氏一門が繁栄する基礎を築きました。土器1・2・3・7は藤原順子の西三條第滞

在に関連するかも知れません。貞観8年には清和天皇の行幸があり、藤原良相の権威は頂点に達します。しかし閏3月に起きた「応天門の変」では伴善男と謀って左大臣源信の排斥に組し、没落を早めます。良相の長男常行が貞観17年（875）に世を去ると、西三條第は衰退し、やがて一族は左京に移動していったものと思われます。池から出土した多くの遺物は、西三條第の繁栄を今に伝える証拠の品といえましょう。

（丸川義広）